

指導資料



鹿児島県総合教育センター

社会 第117号

—小・中学校対象—

平成23年10月発行

「基礎・基本」定着度調査を活用した社会科の授業改善についての具体的提案

本県では、平成16年度から悉皆調査として「基礎・基本」定着度調査（以下、本調査という。）を実施している。本調査の趣旨・目的は以下のとおりである。

基礎的・基本的な内容及びそれらを活用する力について、県内の全公立小・中学校を対象に調査を行い、客観的なデータに基づき定着度の状況を把握することにより、各学校等での指導法改善の取組を支援し、児童生徒の基礎学力の向上を図る。¹⁾（下線筆者）

県教育委員会は、「調査結果の活用（今後の対応）」として、「本調査の更に詳細な分析を行い、その結果を教職員研修等において集中的に活用することなどにより、県下全体での課題認識の共有と必要な対応の推進に、着実に取り組む。²⁾」としている。

以上の点を踏まえ、本稿では、本調査を活用した社会科における具体的な授業改善について提案する。

1 改善が十分でない課題への指導

(1) 改善が十分でない具体例

県教育委員会が発行する「『基礎・基本』定着度調査結果（概要）」には、すべての設問の平均通過率が示されている。

また、通過率の低い内容を確認し、「指導計画等を重点化することにより、授業の指導法改善を図るとともに、演習、個別指導などの補充指導を充実させる」³⁾と述べられている。

しかし、調査結果から指摘された課題に対する改善が十分であるとはいえない状況もみられる。

社会科で具体的に示すと、「世紀」に関する問題もその一つである。

例えば、「豊臣秀吉が天下を統一した1590年は何世紀かを答える問題では、15世紀という誤答が多かった」と報告⁴⁾されており、世紀に対する正しい理解が十分なされていないことが分かる。

表1 「世紀」に関する問題

出題年	学年	設問	平均通過率	設問の概要
H18	中1	4(2)	45.7%	1590年は、何世紀か。
H19	中1	4(3)	61.2%	1542年は、何世紀か。
H19	中2	4(1)	54.0%	1840年は、何世紀か。
H20	中2	4(1)	58.9%	1778年、1840年は、各々何世紀か。
H21	中2	5(1)	58.1%	1868年は、何世紀か。
H22	中2	6(1)	64.3%	1894年は、何世紀か。

さらに、表1から分かるように、毎年、ほぼ同じ趣旨の設問が出題されているにもかかわらず、平均通過率の伸びは芳しくなく、指導が十分であるとはいえない状況もみられる。

(2) 改善のポイント

年表には「0年」がないことを生徒に正しく認識させていないことから、1世紀を「0～99」のまとまりととらえる誤認識が生じる。

そこで、年表における時間について指導し、年表には「0年」がないので「1～100」のまとまりが1世紀であることを納得させることがポイントとなる。

また、例えば593年を世紀で表す場合、593年を593円と考え、100円玉だけで支払いをすると100円が6枚必要になるので、593年は6世紀であると思えることができるようになる。このように100円玉による考え方をを用いて、世紀への変換を生徒に練習させることで定着を図っていく方法も有効である。

このことは、次に示す学習の重点⁵⁾とも一致する。

- 世紀の考え方は100年が基本である。
1～100が1つのまとまりであることを具体的にとらえさせ、まとまりのイメージをもたせる指導が必要である。該当する西暦年は100のまとまりがいくつ必要かを考えさせ、世紀に変換していくことをとらえさせなければならない。
- 世紀についての学習は、授業で歴史的事象の西暦年を扱うときに出题するなど定期的に指導したり、定着が不十分な場合は補充指導を行ったりすることも必要である。

なお、平成23年度から使用されている小学校社会科の第6学年の教科書においても年表については詳述されており、本提案は、小・中学校いずれにおいても効果的であると考えられる。⁶⁾

(3) 具体的な指導法の改善案

ここでは、歴史学習の導入段階において、15分程度の時間を使って、児童生徒に世紀について理解させるための具体的な指導法を提案する。⁷⁾

[発問及び生徒の反応等]

発 問	生徒の反応
1 今日は何年何月何日か。	○ 平成23年 5月28日
2 平成23年を別の表し方にかけることができるか。	○ 2011年 21世紀
<p>〈説明〉 西暦の100年のまとまりを「世紀」といいます。 21世紀は、2001年から2100年までです。</p>	
3 なぜ、21世紀は2000年からではなく2001年からののか。	教具を黒板に貼付（紀元後→黄色、紀元前→桃色）
4 年表は数直線と似ているが、違うところはどこか。	○ 年表には「0」がない。
5 なぜ年表には「0」がないのか。	
<p>〈説明〉 「年」は「時間」である。1年はその年の1月1日0時から始まり12月31日の24時まで連続している。つまり、紀元1年1月1日午前0時と紀元前1年の12月31日の午後12時は重なっている。だから、年表には0年はない。（図1） また、紀元1年から100年を1世紀という。</p>	
<p>図1 年表の仕組</p>	
6 西暦年を世紀で表そう。 ・100円玉で考えてみよう。	○ 関ヶ原の戦いが起きた1600年は、100円玉が16枚なので16世紀だ。
<p>〈まとめ〉 時間が連続している年表には「0年」がないため、西暦1年から100年までの100年を「1世紀」と呼び、21世紀は2001年から2100年までとなる。 100年が1世紀だから、西暦を世紀に表すには100年のまとまりが何個分かについて考えるとよい。 (写真1)</p>	

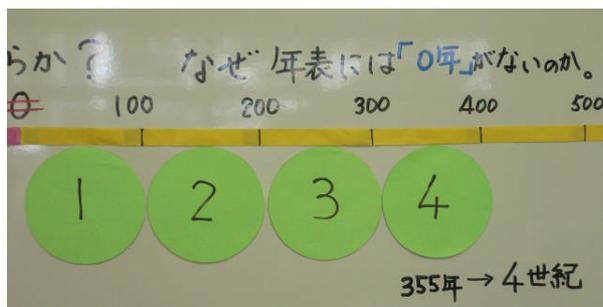


写真1 板書の一部

(4) 教具の工夫



写真2 作成した教具

教具は、紙テープ（紀元後と紀元前を示すため黄色と桃色の2色を使用）に等間隔で線を記入（1間隔が100年）し、裏に磁石を付けることにより、黒板等に自由に貼れるようにした。

また、100年（1世紀）を表す円を準備し、円の直径を紙テープの100年の長さと同じにすることで、紙テープと円が連動できるようにした。（写真2）

この教具を活用することで、児童生徒は、西暦を世紀に換算する際にイメージが描きやすくなる。一方、教師もいつでも繰り返し指導することが可能になる。

2 調査問題を効果的に活用した指導

(1) 調査問題について

県教育委員会は、「各学校においては、今回の調査票の問題を授業の終末や単元末の評価場面などで活用し、定着度の把握や個別指導に役立て」⁸⁾るように指導

している。

また、実際に調査問題を繰り返し活用している学校もあり、その有効性も示されている。⁹⁾

(2) 調査問題の活用についての提案

調査問題は児童生徒に身に付けてほしいと考える学力について具体的に示すとともに、十分に精査されたものである。

さらに、調査問題で使用された資料は、該当單元における中心資料であると考えられる。

ここでは、調査問題で使用された資料を基に、新たな設問を作成する活用法について提案する。

次に示す「活用例」¹⁰⁾は、平成16年度の中1の問題で使用された資料を基に、新たな設問を考えたものである。

ア 調査問題の一部

[資料1]



[資料3]



[資料2]



太郎さん：資料1の建物は、世界最古の木造建築として有名な(①)ですね。

先生：そうですね。当時を代表する人物は知っているよね。

太郎さん：はい。その人物が政治を整えるためにつくった冠位十二階や十七条の憲法について学習しました。

先生：当時は、②大陸の文化や制度を積極的に取り入れるために、はじめて中国へ使節が送られました。そして、大陸の文化や制度をもとに、国家の仕組みが整えられましたね。(略)

イ 新たな設問例

① 日本で初めて世界遺産となった資料1の建物（下線を引き下線部Aとする）を建立した人物を、漢字で書

- きなさい。
- ② 「冠位十二階」の目的を説明しなさい。
 - ③ 下線部②について、中国へ使節を送ることが、なぜ文化や制度を取り入れることになったか書きなさい。
 - ④ 聖武天皇が大仏を作った理由を書きなさい。
 - ⑤ 資料1～3の写真に共通するものを書きなさい。
 - ⑥ 資料2は、聖武天皇が仏教の力で国を鎮めようとして造立した大仏である。この大仏が造営された場所を右の地図中から一つ選び、その記号を書きなさい。
(地図は追加で作成し、貼付する)
 - ⑦ 資料3の建物は、私たちが使用している硬貨に描かれていることでも有名である。どの硬貨に描かれているか書きなさい。
 - ⑧ 資料1～3に最も影響を与えた宗教名について、最も適当なものをア～エの中から選びなさい。
ア キリスト教 イ 儒教 ウ 仏教 エ イスラム教

(3) 新たな設問を作成する効果

授業は、問いと答の連続によって構成されている。特に、社会科の授業においては、単元（小単元）の目標に到達させるためには、単元（小単元）全体の内容の構造を把握することが大切である。

文部科学省も、「歴史の学習は、ややもすると個別事象の並列的な提示と記憶に傾いて、ひとまとまりの学習内容の焦点がつかみにくくなりがちである。今回の改訂では、例えば各事項の学習を重ねることで中項目ごとの学習のねらいが達成され、さらにそれら大観することで大項目全体の特色がつかめるという学習内容同士の関係性を重視し、その構造化を図った。」と述べ、「歴史的分野の学習内容の構造化図（部分例）」を示している。¹¹⁾

しかし、学習内容を構造化するためには、知識を分類する視点が重要となる。このことについて、岩田は次のように述べている。

社会科の授業の基本は(W)(H)(D)(V)の問いの組合せである。この問いによって習得される知識の質も異なってくるので、問いの設計が社会科授業の基本になるのである。同じように、授業分析においても、この問いの分類および知識の分類が、授業記録を分析検討するさいの貴重な道具となる。¹²⁾

例えば、歴史的分野の「律令国家の形成における聖徳太子」の授業においては、「593年聖徳太子が摂政になる」などの部品となる知識（図2）を習得させ、さらに「17条の憲法」や「冠位12階」、「法隆寺の建立」、「遣隋使の派遣」等の内容について学ばせ、習得した知識（中間の知識）を活用して「聖徳太子は、日本を天皇中心の中央集権国家にするために、諸施策を推進した。」という説明力の大きい知識を習得させることをねらっている。

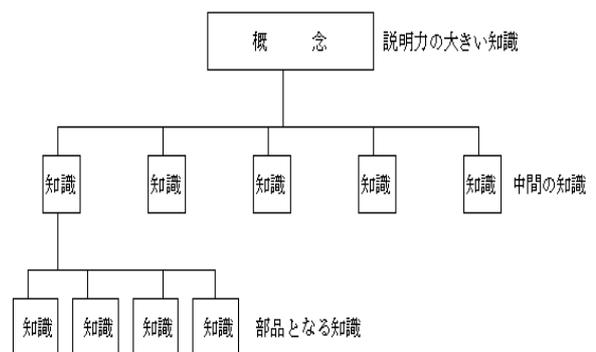


図2 社会科の知識の構造モデル

新たな設問を作成することによって、その単元（小単元）の「知識の構造」のどの部分についての問いであるのかが明確になるとともに、指導した内容に不足しているものがなかったかについても確認をすることができる。また、児童生徒が多様な視点から社会的事象をとらえる

ことにもつながる。

このように、教師が多くの問いをもつことができれば、学習内容の構造がより精緻になるとともに、教師の指導力の向上にも寄与することになる。

3 「活用する力」を育成する指導

(1) 「活用に関する問題」について

平成20年度の本調査から「活用に関する問題」が出題されている。¹³⁾

本調査における「活用に関する問題」も、全国学力・学習状況調査のB問題と同様に、学習指導要領の内容から出題されており、「活用する力」を育成するための授業改善が求められていることを示しているといえる。

(2) 調査問題を使った「活用する力」を育成する授業改善

ここでは、「活用」を学習活動と捉え

- | |
|---|
| ア 先行生活経験や先行学習経験で習得した知識や技能を「活用」して理解を深める。 |
| イ 習得した知識や技能を他の事例や類似事例で「活用」する。 |
| ウ 理解したことを論理的に記述させる。 |

などの学習活動につなげるための調査問題の活用について述べる。¹⁴⁾

図3は、日本の米の生産量と消費量の変化を示した二つの折れ線グラフを基に、折れ線グラフの特徴と、米は干ばつや大雨、低温等の気候の影響を受けやすいので、生産量は年によって変化が大きいという日常生活で得られる知識とを結び付けて、グラフのアが米の生産量であることを論理的に記述し、文章を完成させる問題となっている。

つまり、植物（農作物）は気候の影響を受けやすいので生産量は安定しにくいという実生活や先行学習経験で得た知識を「活用」し、米の生産量のグラフを特定させるとともに、その理解の内容を記述させることによって表現させている。

(1) 資料1は、わが国の米の生産量と消費量の変化をあらわしています。下の□の中の説明の続きを書きましょう。

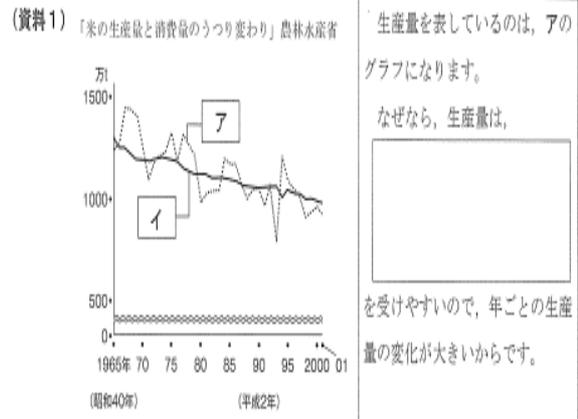


図3 調査問題の一部（平成20年度小5）

このように「活用」させる先行経験を明確にした上で、知識や技能を「活用」させることによって理解を深める授業（左欄のア）や論理的に記述させることによって説明する力を育成する授業（左欄のウ）が構想できる。

(3) 今後の課題

全国学力・学習状況調査においては、B問題についてのねらいや指導の在り方が明らかにされ、学校現場における指導法改善に活かされていることから、本調査においても「活用に関する問題」について議論することをとおして、「活用する力」についての定義を明確にするとともに、その力を育成するためにはどのような授業が求められているのかを具体的に提案していく必要がある。¹⁵⁾

本稿では、以下の3点について具体例を示しながら述べてきた。

- 本調査で平均通過率が低かったにもかかわらず、改善が十分でない具体例として歴史的分野における「世紀」を題材にその具体的な指導法についての提案
- 本調査の問題を活用して新たな設問を作成する方法の紹介と意義
- 「活用する力」を育成するための本調査問題を活用した授業の構想

本調査は、小学校第5学年、中学校第1学年、第2学年を対象に実施されているが、当該学年以外の児童生徒にも十分活用できるものである。また、小・中連携を図っていくための具体的な指標ともなり得るものでもある。

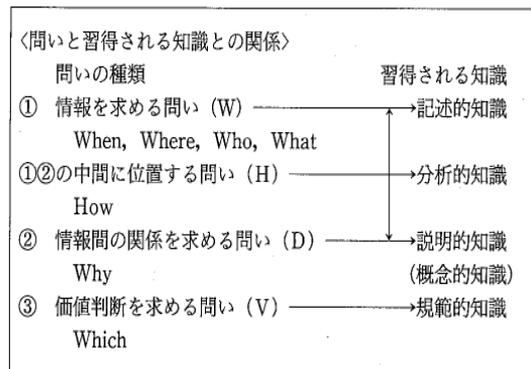
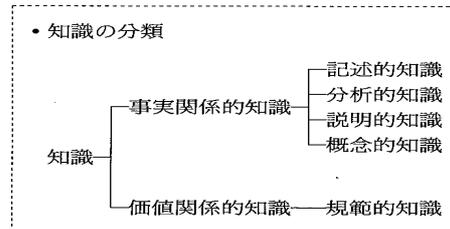
本調査の有効活用について、全教職員で知恵を出し合い、本県児童生徒の基礎学力の向上がより一層図られることを期待したい。

一 註及び引用文献一

- 1) 県教育委員会『平成22年度「基礎・基本」定着度調査結果(概要)』平成23年のP. 3。「I 調査の概要 1 趣旨・目的」から引用。なお、本冊子は県教育委員会のWebサイトにも掲載されている。
- 2) 同上(1)目次の前頁の「4 調査結果の活用(今後の対応)」から引用。なお、ここでは、「鹿児島ベーシック」の緊急改定を行うことも明記され、各学校への積極的な学力向上への支援についても記述されている。
- 3) 上掲(1)のP. 1。「本調査結果による指導法改善について」の各設問ごとの通過率の項から引用。
- 4) 県総合教育センター「指導資料」社会第108号平成19年5月 P. 3から引用。
- 5) 県教育委員会は、平成19年度「基礎・基本」定着度調査結果各教科の傾向(中学校)についての冊子を作成し、平均通過率の低い問題と誤答傾向の分析、改善策について、各学年3事例ずつ紹介している。本項における引用は、P. 16である。なお、本冊子も県教育委員会のWebサイトに掲載されている。
- 6) 例えば、教育出版「小学社会6上」では、歴史年表の使い方と題して、「年表は、キリストが生まれたと考えられている年を西暦1年とし、その年を基準にして、1年、2年、2000年というように表します。」「年表には、100年間を一つの単位とした世紀という表し方があります。21世紀は、2001年から2100年までです。」(P. 147)などの記述があり、他社にも同様の記述が見られる。小学校で指導する場合、紀元前についての学習には配慮する必要があるが、年表に「0年」がないことについては指導することができる。
- 7) 本提案は、筆者が土曜講座(総合教育センター実施)において模擬授業を行い、出席者と協議し、改善を図ったものである。
- 8) 前掲(1)のP. 1「本調査結果による指導法改善につい

て」の調査票の項目より引用。

- 9) 詳しくは、県教育委員会『学力向上取組ガイド～PDCAサイクルの確立による実践をとおして～』平成21年を参照されたい。
- 10) この設問例は、土曜講座の演習で、出席者が作成したものの一部である。
- 11) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版 平成20年9月 P. 11から引用。なお、「歴史的分野の学習内容の構造化図(部分例)」は、同P. 12に掲載されている。
- 12) 岩田一彦『社会科授業研究の理論』明治図書 平成6年 P. 129から引用。知識の分類及び問いと習得される知識との関係については、岩田一彦『小学校社会科の授業設計』東京書籍 平成3年 P. 44に以下のように整理してある。



- 13) 上掲(1)を含め、県教育委員会が発行またはWebサイトに掲載している本調査に関する結果の概要を比較すると、平成16年度から平成19年度までには、「活用」に関する記述は一切ないが、平成20年度以降は、「活用に関する問題」、「活用する力」などの文言が明記されている。

ただし、どの問題が「活用に関する問題」であるかは明記していない。

- 14) 本稿における「活用」の考え方は、兵庫教育大学(株)ベネッセコーポレーション共同研究プロジェクト推進室『活用型学習の指導方法及び評価方法の研究』平成22年3月を参考にした。
- 15) 文部科学省は「言語活動の充実に関する指導事例集」を作成し、小学校、中学校ともに10事例ずつ紹介している。詳しくは次のWebページを参照されたい。http://www.w.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiouen/1300990.htm また、国立教育政策研究所も「評価方法等の工夫改善のための参考資料」を作成し、Webサイトに公開している。特に「第3編評価に関する事例」は、「活用」を考える上でも有効である。詳しくは次のWebページを参照されたい。<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidouiryou.html>

(教職研修課)

